
自分勝手にin my life

emanon

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

自分勝手に i n my life

【著者名】

emanon
emanon

【ノード】

N4696D

【あらすじ】

飲みすぎた朝、自分の部屋をみると、そこには中学生くらいの女の子。「君、誰?」「ヒドイッ!! 昨日は私のこと無理矢理……」

<http://emanon98.es.land.to/o/ri.html>こちらは、イメージ画です。よろしければ、書庫、画廊などもご覧ください。<http://emanon98.es.land.to/index.html>感想、評価などお待ちしております。

「自分勝手にIn my life」
emanon

「今回、問題となつた環境ホルモンといつのは、生命が自分自身で分泌するホルモンのかわりに、受容体と結合し……」

頭イタイ……、体ダルイ……、典型的な一日酔いだ……。

「体内のホルモンバランスを乱すことだ……」

テレビのニュース番組か……、また、テレビつけっぱなしで寝ちゃつたか……。我ながら飲みすぎた、あれからどうしたつけなあ……、テレビなんかつけたかなあ……。電気代かさむなあ、消さなきや……。

…。

ヘイタはゆっくり眼を開けた。日差しが眼にしみる、日は既にだいぶ高いようだ。昨日は遅くまで飲んでいたから、下手をするともう正午をまわっているかもしれない。

続いて、のそのそと体を起こし辺りを見回す。

どうやって貰つて来たかはよく覚えていないが、確かに自分の部屋だ。

ふと、自分の部屋なのに見慣れないものが眼に入った。女の子だ。長袖のTシャツに、ジーパンを穿いている。両方とも、サイズがまるであつていない、もう一人分くらい入りそうなほどブカブカだ。髪は後ろで一つにまとめていて、腰まで届くほど長い、たぶん、中学生くらいだね。見知らぬ女の子がヘイタの部屋で座つてテレビを見ている?

ヘイタの視線に気がつき、少女がふりかえった。

「あ、おはよ~」

間の抜けた沈黙。

「君……だれ……？」

もう一回沈黙。

「ひどいっ！」

突然、少女は顔を覆い泣き崩れた。

「……はい？」

『何が!? どうして…? どのよつこ…?』

通りすがりの私にいきなりからんで来て、無理やりここに連れ込んで……』

「ホワツトー?」

「社長の息子だからお金はこくらでもあるつて……、みんなやつてることだつて……」

『おれは酔った勢いでなんつー』と……ヘイタはたぶん人生で最大の後悔をした。でも、待てよ……たとえ酔つていたとしても、おれにそんな根性あるわけないし、今、ちやんと服着てるしつつ、と考え直す。

「嘘……だよね? つてこつか嘘でしょ」

「あはは、ばれた?」

先ほどまでの悲壮な雰囲気はどうへいったのやら、少女は、悪びれもせず、舌をペロリと出した。

昨日は思い返せば悪夢の夜だった。

田の前にビール、そして隣には酔払い……。

「おら、手が止まつてんじやんよ~ ほりほり~ ジョッキもつて、ぐいっとこきな~, あ、すいませ~ん、ビールもう一本追加~」酔いがまわつてフラフラな手が、無理やりヘイタにジョッキを握らせる。

「いや、おれは明日の授業が……」

「あん? やかましい! アタシだって講義ぐら~にあるよお。アタ

シに飲ませて自分だけシラフで居ようつたつてそういうひかないってえの」

「なにが飲ませてだよ、自分で引っ張ってきて、そっちが飲ませてるのにさー、この酔っ払いが……」

横から腕が伸び、ヘイタの首に巻きついた。

「アタシは酔つてない！ 全然シラフよお？ シ、ラ、フ！」
腕に力がこもる。片手で頭をロツクすることも忘れない。酔っ払っているせいか普段からそうなのか、かなり本気で絞めているようだ。
「ギブ！ ギブアップ！ わーかつた、わかつたから！ 飲むよ、飲みます！」

「ん、わかればよろしい」

隣にいる酔っ払い カオルはヘイタの幼馴染だった。

「大体、アンタさあ。なんで落ちんのよー、成績そのものはアンタの方がよかつたのにさー」

今年の春、同じ大学を受験したのだが、カオルは無事に現役合格を果たしたのに対し、ヘイタは滑ってしまい、同市内で浪人生活だつた。

「そりや、俺も正直言つておかしいと思うし、納得できぬいけどさ、落ちちやつたものは仕方ないじゃん、考えてもしうがないって」「はあ？ そういう考え方だから落ちんのよ。落ちたら自殺考えるくらいなノリでキリキリ勉強しろつてえの」

「いや、ノリで自殺するのもどうかな、と思つのですが……」

「四の五のゆーなつての、とにかく、あたし、一年も待つのは嫌だからね、今年は絶対合格しなさいよ」

「いや、そういうことなら、飲みなんて誘わないで勉強させて欲しいのですけど……」

「ん~、今度はお花畠まで行きたいの~、それともその先までいつてみる~」

カオルの腕が再びヘイタの首筋に巻きついた。しかも、今度は容赦なく動脈を圧迫している。カオルの目は完全にすわり、冗談抜き

に、そのまま絞め落としてしまいそうな雰囲気で力を込める。

「ちよつ、すいません、ごめんなさい…なんでもないです！」

「あん?」あんですねんだから警察は要らなーいって言葉知ってる?

いいわ。イッキ一回で許してあげる すみません、ビール、大

「ヨシッキー一つおねがいします！」

卷之三

ヘイタはジー^ルが苦手だ。第一に苦いし、ネットリしている泡も嫌いだ。ゲップをしたとき、出なくていいもの、内容物まで出てしまいそうになる。

「お待たせしました。大ジョッキーになります」

店員がバケツのようなジョッキになみなみと注がれたビールを持ってきた。それはヘイタには黄金色の悪魔に見えた。

ヘイタはカオルの方を見た。すでに、ジョツキを持つて構えている、もうどうしようもない。いつもこれで後悔しているが、わかっていてもパターンにはまってしまう。

ジ田シ#が書籍

ジヨツキが音をたててぶつけられ、各自の口に運ばれる。

力オルは文字通り、一息にジョッキを開けたが、ヘイタは苦味と臭いに顔をしかめながら四苦八苦する。見ているのが切なくなるほど苦しそうだ。それでもなんとか飲み干す。

不意に視界がグラリと揺れた。眼を開くのがつらい。ヘイタは、そんなに酒に弱いほうではないが、さすがにバケツのようなジョッキをイッキ飲みすればそうなるのは当然だ。

「ヘータあ。なに酔つた真似してんのよ」

ヘイタは揺れる視界で力オルをみた。ジョッキを持ったまま机に突つ伏している。危険な体制だ。

「…………へたあ」

そういう残し、彼女は夢の世界へ旅立つてしまつた。

「おい、カオル！起きろって……」

呼びかけてもまるで屍のよつて反応が無い。完全にノックアウトさ

れてしまったようだ。

「だから言つたのに」

ヘイタはこれからやらなければならない、カオルを家まで送り届けるという重労働を想い、深いため息をついた。

「どうせ～い」

ようやくカオルのアパートに着いたヘイタは、肩を貸していたカオルを玄関に座らせた。カオルは未だに夢の世界から帰つてこない。

「カオル、起きろ～」

「んあ～」

カオルは、起きてるんだか、寝てるんだか、よくわからないような声で返事をした。 全く……。

「おれはあ！ かえるからあ！ 鍵い！ しめりよお！」

「ん～、わかつた～」

酔っ払いにも聞こえるように耳元でどなつて、カオルのアパートをでた。外に出ると、重労働でかいた汗が冷えて寒かつた。もう四月も終盤を過ぎるが、夜はまだ冷える。

カチリと鍵が閉まる音が鳴つたのを確認してから、自分のアパートへ向かつて歩き出した。

今日のようなことは一度や二度ではなかつた。というか、カオルと飲むときは大体このパターンである。週末になるといきなり飲みに誘われ、こっちの都合も関係なしに連れて行かれる。そして、ヘイタが浪人したことへの文句だの、性格に関する文句だのを散々聞かされたあげくに、勝手につぶれてしまうのだ。こっちの都合も考えて欲しいものだ、と思う。

「つていうか、なんで浪人した自分が文句いわれなきやいけないんだよ～、性格にしたつて、そういう性格なんだからしちゃうがないじやんかよ～」

そうぼやいてみる。けれど、カオルと一緒に遊ぶのもいいな、と思つてノコノコとついていつてしまふ自分が情けない。性格はどうか知らないが、黙つていれば結構可愛いし、プロポーションもいい。誘われたらついていきたくなるのも当然だろうと思う。

「どうでもいいけど、疲れたな~」

適当に休める公園に向かい、ちょっと休んでいくつもりでベンチに腰を下ろした。多少肌寒いが、酒が入つてゐるせいか、あまり気にならない。体が重かつた、座っていたのが段々と重力にひかれ、ベンチに横になる。ヘイタにこのまま夜を明かすつもりはなかつたが、こういう場合、一度横になつたら後は不可抗力である。睡魔が誘つまま、夢の世界に墜ちていった。

「おきてください、こんなトコで寝ないでくださいよー」

ヘイタは、自分に対してもう声を聞き、ぼんやりと眼を開けた。少女が顔を覗き込んでいるのが見える。

「よかつた~、何度も呼びかけても起きないから、死んじゃつてるかと思いましたよ~」

少女は、夜の公園には不似合いな能天気に明るい声で言った。

「ん~、あ~、起こしてくれたん？ ありがとう~」

「いえいえ~、目の前で凍死とかされると寝覚めが悪いんで起こしてただけですよ~」

何気に酷いことを言う少女である。

「結構笑えない冗談だね~、じゃ、おやすみ~」

頑張つて起こしてくれた少女の厚意を受け流し、ヘイタは再び寝息をたて始めた。完全に泥酔モードだ。

「ちょっと、ちょっと、せつかく起こしたのに寝ないでください~！ つていうか、寝るなー！」

少女は耳元で叫んだり、頬をつねつたりといろいろしてみるが、ヘイタはうめき声をあげるばかりで、一向に起きる気配はない。

「つたく……、しょうがないな」

少女は夜の公園に一人ぼやいた。

「で、そのままほっぽつとくわけにいかないから、住所とかわかるものないかな」とか思つて、手荷物あさつたら、電気代の請求書が入つてて、ちょうど同じこの住所が書いてあつたから、頑張つて引きずつてきたんです」

「あ～、なんか言われてみれば、そんなこともあつたような気がするなあ。あまりよく覚えてないけど」

ヘイタは台所で卵焼きをひっくり返しながら言つた。手首のスナップを上手く使い、なかなか手馴れた手つきだ。

浪人中のヘイタがそんなに高い部屋を借りられるはずもなく、六畳一間の安っぽい部屋だ。それでも一応料理のできるスペースはあつた。

「これからは飲みすぎには気をつけたほうがいいですよ？凍死しちくなければ」

「しようがないだろ、飲んだんじゃなくて無理やり飲まされたんだから……、よし、できたつと……」

ヘイタが台所からリビング兼寝室に戻つてきた。お盆に一人分の朝食が載つている。献立は炊きたてご飯、卵焼き、味噌汁である。

「あ、わたしの分も？」

「うん、死の淵から救つてもらつたお礼にはささやかなものだけど、どうぞめしあがれ」

「そういうことなら遠慮なく……」

少女は、手を合わせて「いただきます」とやつてから、卵焼きを口に運んだ。外はカリッと香ばしく焼いてあるが、中はあくまでふんわりとしている。味付けも絶妙で、しつこくないのに、きちんと自己主張をしている。これを一言で言つなら……

「おこしい！」

「ん~、やういってもらえたると、作った甲斐があるつてもんだねえ」

限られた生活費でそれなりにおいしいものを食べようと思つたら自分で作るのが一番いい方法である。味噌汁はインスタントではなく、ちやんとダシをとつたものだし、「ご飯も、炊くときに蜂蜜（そうするとおいしく焼き上がるのだ）を入れたりと、いろいろと工夫がこらしてあつた。

少女は、よほどお腹がすいているのか、よほどおいしいのか、それともその両方か、一心不乱にハシを動かす。ヘイタはそれをみて思わず笑みを漏らした。

「あ、すいません、お腹空いてたんで」

少女がヘイタの視線に気づき、顔を赤くした。

「あ、いや、ただ、自分が作ったのを人がおいしそうに食べてくれるのってうれしいもんだな~、つてさ、まあ、主夫の喜びってやつ？」

そのまま見ているのも気まずくなり、ヘイタは自分の朝食にハシをつけ始める。

しばらぐ、ハシと茶碗が触れる音が流れる。

「そういうえばさあ……」

ヘイタは少女が食べ終わるのを見計らい、声をかけた。

「はい？」

「助けてくれたのはありがたく思つんだけど、男の家に外泊とかして親御サンとか大丈夫なん？」

少女は、少し考えるようなそぶりを見せ、次に数学の問題が解けない受験生のように頭を抱えた。

「……うーん、どうなんでしょう……？」

「そもそも、あんな時間に、公園なんかぶらついてるのも、危ないと思うんだけど……、もしかして家出でもした?」

「そう言われてみると、そうかもしれないかな~とか……」

「いや、そういう微妙な言い方されても……」

「なんていうか、そういうこと何にも思い出せないんですよ」「え！？それってもしかして記憶喪失ってやつ……？」

「言いにくいくらいんですけど、たぶん、そ～かな～って」

照れくさげに、鼻の頭をかきながら少女は答えた。記憶がない割にはのんびりしてるというか、危機感がないというか……。

「いやいや、お嬢さん、もっと深刻に考えよつて……」

「そんなこといわれたって、思い出せないものは思に出せないしきりだつたら、頭使うだけ疲れるじゃないでですか」

ホントにノウテンキである。

「いやれあ、例えば、今口どきで寝るかとか、『飯はどうするか、とか……』

「う～ん、そうですねえ……、どうしましょ～っ？」

「……今までどうしてたの……？」

「寝場所は駅とか公園とかでなんとかなりますよ。人間、案外どこでも寝れるんです。警察とか補導員とかから隠れるのがめんどくさいんですけど……。』『飯も、無一文つてわけじゃないんで、贅沢しなければ、もうしばらくは大丈夫かなって」

そんなトコで寝てたら、変質者に誘拐監禁されるぞ、とか、「もうしばらく」は大丈夫って、「もうしばらく」が過ぎたらどうするの、とかツツコミ所は山ほどあったが、何を言つても無駄だらつ。とヘイタは思つた。 ん？ そういうえば……

「なんで警察に行かないの？ 捜索願でも見れば、自分の身元がわかるかもしれないし、そういうなくても保護くらいはしてくれるんじやないの？」

「警察は嫌いなんです」

「へ？ なんで？」

「さあ？ なんといつても記憶喪失ですから、その理由もわかりません。嫌いなものは嫌いなんです」

『いや……、まあ、そうだけど……』その台詞は口ひ出さず口飲み込んだ。

「ところでお兄さん」

少女は声のトーンを変えて言った。

「わたしより重い体を、ここまで頑張って運んで、見返りが朝食だけっていうのはひどいですよね~」

「え？ どういうこと？」

「渡る世間は金次第、地獄の沙汰は鬼ばかり……って、ここまで言えればわかりますよね~、三枚でいいですよ？」

さつきまでの軽い笑いが、小悪魔のような笑いになつてゐる。

「いや、微妙に間違てるって」

「ぶつぶつ言わない。それとも、寝てるときに財布」ととつたほうがよかつたですか？」

確かに、昨日の様子なら財布ごと盗られても分からなかつたし、無くなつてることに気づいても、落としたと思うだろう。それを思えば、一応良心的である。

ヘイタは渋々財布に手を伸ばし、中を開いた……が、札は何も入つていなかつた。昨日、出かける前に中身を確認したときには、四五枚はあつたはずだ、どうやら、金銭面でも飲みすぎたらしい。

「ごめん、無い」

「え？ 三枚つて万札じゃなくて千円札ですよ？」

「悪いけど、無いものは無い。」「メン」

払えないことも無いが、別個にしてある光熱費、食費などの生活費から出すわけにはいかない。浪人してしまった以上、引け目を感じ、学費は無理としても生活費はバイト代で工面している。浪人生という立場上、バイトは生活できるギリギリ、その上で力オルにつき合つてているのだから、残りは雀の涙である。

大体、少女が勝手にやつて、勝手に金を要求しているのだから、言われたとおりに払う必要などなぞそんなものだ。だが、そんな恩でも、それに報いようとするのが、良くも悪くもヘイタであった。

「悪いけど、今は払えない。そつだな、一ヶ月くらいまつてくれない？」

「えへ、一ヶ月後、また同じ事言われなことも限らない……、しらばつくれられるのも嫌ですし、『明日の日より今日の五十』って言ひ……」

少女は、そのまま「うーん」と考え、言ひた。

「わたし、しばらへじに泊まらせてもらひから、その分の宿泊代つてことで……どうですか？ 食費は別に払いますし、家事もなるべく手伝いますから」

男の部屋に、女の子が一人で泊まるというのは非常識な気がするし、いろいろと危険も感じるものなんぢやないかとヘイタは考えたが、女の子は女の子でも、誰が来るか分からぬ公園や、駅に平氣で止まるれる女の子だ。本人は別に気にしないのだろう。また、そんなところで寝るよりはヘイタのアパートのほうが安全だろう。

「そういうことなら全然かまわないよ、どうせ一人暮らしだししね。でも、悪いけど合鍵渡すのはちょっと……」

「それでかまいませんよ、寝るときに雨風、夜露と補導員がしのげれば十分です」

少女はそこで、居住まいをただし、三つ指をついた。

「ふつつかものですが、よろしくお願ひします」

「そういうえば名前、聞いてなかつたね。……つてもしかして覚えてない？」

「はい、もちろん、記憶喪失ですから」

「ん~と、じゃあ、呼ぶときなんて呼べばいい？」

「あ、それでしたら、椎名ナナ、と呼んで下さい。名前聞かれたらそう名乗ることにしてるんです、名前無いといふこり不便ですから」

「うん、わかつた、ナナちゃん……ね」

「うして、ヘイタは、このわけのわからない少女としばらへ同居する」となつた。

「『』馳走様でした」

六畳間の真ん中に置かれたテーブル　　といつよつちやぶ台だらう　　の上には空のカレー皿が一枚、仲良く置かれていた。

「ヘイタさんはカレーも上手ですね」

「いやいや、カレーなんて誰が作つても同じだよ」

ヘイタはそう言つて笑いながらカレー皿を重ねると、それを持って台所に向かう。

洗面器に水を張つてつけておく、といつじとはせず、水で軽く流し、スポンジに洗剤をたらして洗い始める。

「へえ、『つけておいて、まとめて洗う』とかやらないんですか」「ん~、やっぱり、使つたあとすぐ洗つたほうがよく落ちるしね」洗剤の泡を水で流し、表面を指でさわる。キュッという音がするのを確認し、布巾で拭いて、食器棚に片付ける。

「結構マメなんですね」

横目で見ていたナナが感心したように言つた。ヘイタが声のしたほうをみると「親が死んでも食休み」とばかり堂々と大の字になつていた。本当に団太い少女である。

「私、一人暮らしの男性つて、まず、散らかっている部屋と、たまつている洗い物を想像してました」

六畳間は小されいに片付けてある。そうでなくてはいくら体が小さいとは言え、ナナが大の字になるスペースは無いだろう。

「ま、そういうものかもね。おれも始めたんだけど、いろいろあつてさ」

「いろいろつて?」

「いろいろつていうのは、まあ、いろいろだよ」

ヘイタはそう言つて苦笑する。

「『めんなさい、ちょっと気になつたのですから……』なんとなく、聞いてはいけないことを聞いた気がして、ナナは申し訳なさそうに言つた。

「いやいや、全然、そんなモンぢやないんだけど、説明するのはち

よつと恥ずかしくて、ね

「うーん、そういう言い方されると聞きたくなりますね～、ま、いいです。今日は聞かないで置きます」

ナナはそう言って意味ありげに微笑した。

「あ、ところで、シャワー使わせてもらつて良いですか？」

カレーの鍋を洗っていたヘイタの手が一瞬止まる。

「い、いいけどさ……」

さすがに思わずしどりもどりになるヘイタ。

「何か？」

「もうちょっと自重するつていうか……、おれ、一応男だし、外で入つてきたり？入浴料くらいだせるしさ」

「あ、私、そういう気にしませんから大丈夫ですよ～、んじゃ、お先に失礼しますね」

そう言うとスタスターとヘイタの後ろをすり抜け、バスルームへ入ってしまった。なかから衣擦れの音も聞こえる。ホントに脱いでいるようだ。

「おいおい……、おれは一応男だぞ……」

ヘイタはそう呆然とつぶやいた。その時

「ガラツ！」

不意にバスルームの扉が開き、下着姿のナナが顔を覗かせた。一応危ないところは隠れているが、華奢な鎖骨や首筋などが見え、ヘイタは思わずドキッとした。

「ちょっとお願ひなんんですけど

「な、何？」

「よかつたら着替え貸してもらえませんか？　ついでだから着てた服洗いたいんで」

「わ、わかった、適当にその辺に置いとくから、そういう際どい姿をみせるな！　一応おれだって男だぞ」

「『一応』ってところに悲しいものを感じますね～、じゃ、お願ひします」

あわてるヘイタをどこ吹く風と、ナナは平然と扉を閉めた。

「つたぐ、おれってなんでこんなに男扱いされないんだ？」

カオルのことも思い出し慄然と一人愚痴る。

「何か言いました？」

「いや、別に」

『もう知るもんか、どうにでもなれ』ヘイタは心中で投げやりにつぶやいた。

寝つきがよきやうな服を適当にタンスから選び、バスタオルと一緒にバスルームの前に置き、バスルームと六畳間のドア 防寒などのためいくら狭くともドアがついている を閉めた。あの少女のことだ、バスルームから手を伸ばして服を着るなんてことはせず、裸のまま外に出てくるに違いない。こうしておけば、裸を見ないですむ。

ヘイタは六畳間に戻り、ベッドに寝転がるとなんとなくテレビをつけた。ドラマが移った、よくあるラブコメ物が映った。自然と、ため息が漏れた。

記憶喪失の少女がいきなり男の前に現れる。まるつきりフィクションだ。小説ではよくある手だが、まさか自分の身にそんなことが起こることは考えたことはない。まったく、笑えたものじゃない。

そもそも、あの少女は普通の女の子ではないだろうと思う。もつとも、普通という定義をヘイタは完全に理解しているわけではないが、それにしたつておかしいところが多くすぎる。自分の裸に対して無頓着過ぎるし、警察に行かないのもおかしい。普通、記憶を失くしたら警察にでも行つて捜索願でも出でないか確かめてみるのが普通だろう。なのに、警察は嫌いだと言い、それをしない。

警察を避ける、ということは何かやましいことがあるのか、元の生活に戻りたくないのか……。

ヘイタはそこまで考えたところでやめた。そんなことを考えても無意味だからだ。別にやましいことをしてようが、どこのその家出娘で搜索願が出てようが、それはナナ個人の問題である。自分が考えるべき問題ではない、と思うからだ。とりあえず、考えるべきなのは……

「お風呂、空きましたよ」

風呂あがりのナナがリビングに入ってきた。

さつきヘイタが出しておいた服を着て、ヘイタのものなので当然サイズはかなり大きめで袖口は何回もまくりあげられてその隙間に幼い魅力を感じさせる。また、「コ」の字の胸元から片肩が丸々露出していて、華奢な鎖骨とノーブラの膨らみが見え隠れするのも理性にとつて危険だ。思わず数秒視線を固定してしまう。

「どうかしました?」

「いや、なんでもない」

そう言つてヘイタは無理やり視線を引き剥がした。つぐづぐ、この少女は無防備過ぎると思つ。

少女は、ヘイタの隣にチョコソンと座り、テレビのコモソモンを手に取つた。

「あ、テレビ、観てますか?」

どうやら、チャンネルを変えたいらしい。

「いや、観てないから、適当に観たいの観てよ、おれシャワー浴びるし」

「いえ、観たいのがあるってわけじゃないんですけど、いつも安直な展開の恋愛ドラマって大嫌いなんで」

そういう、ナナの表情をふと見ると、親の仇を見るかのように歪んでいた。嫌いというより、憎しみに近い感情を持っているのかも知れない。

ヘイタが自分の顔を見つめているのに気づいたナナは、あわてたようにいつもの表情を貼り付ける。

「『メン、観てたわけじゃないんだけど、テレビつけるのがクセみ

たいになつてゐるから……」

「あ、いえ、こちらのまゝが『すいません』です、私、好意で泊めていただくのにわがまま言つちやつて」
ナナはすまなそうに、しかし、笑いながら言つた。それは一瞬見せた表情を誤魔化すように見えた。

ヘイタも誤魔化すように曖昧に笑うと、着替えを持つてバスルームに入った。

いつもはカラスの行水のヘイタだが、今日はゆっくりと湯につかる。少し落ちつきたいと思つたからだ。
いろいろあつて疲れた。なんというか、一人増えただけでこんなにも疲れる。充実すると言い換えても良いかもしれない。するものだろうか。テレビのチャンネルについてのやりとりにしても、二ヶ月前まで、実家で家族とやつていたのに、ずいぶんと忘れていた気がする。

体の芯まで温まるまで湯船に浸かる。バスルームの中で体を拭き、その場で服を着る。いつもは湿氣でぬれるので裸のまま外にでて着替えるのだが、今日はナナがいるのでそんなことはしない。
バスルームを出るとナナは床にうずくまるように眠つていた。ナナもいろいろあつて疲れたのだろうし、いつもはどこで眠つているのか知らないが、室内に比べて安心できるところではないだろう。
ナナに毛布をかけてやろうとベッドの前まで行き、思いどどまる。記憶喪失の少女が受けた苦勞を想像する。ヘイタに野宿の経験は無いが、難儀なものだということくらいいはわかる。こづいう時くらい、ベッドをゆずる。

ナナに近寄つた。よく寝てゐる、起こすのはしのび無い。さて、どうやってベッドに連れて行こうか……。

鼻の頭をかき、視線をそわそわと動かした後、頭の中で言い訳と

気合をこめてナナを抱き上げてベッドまで連れて行き、寝かせて布団をかけた。その後、ヘイタはトレーナー一枚重ね着し、床にゴロリと寝転がつた。寒いかな、と思ったが、結構暖かかった。

五月の暖かい日差しが、校舎の窓から差し込んでいた。ヘイタは後ろの窓際席で、頬杖をつきながら講師が熱心に授業を続けるのを見ていた。

ヘイタの通う予備校は業界では大手で、全国に展開されている。実家から通えるところにも校舎はあったのだが、実家の近くにあるやつはサテライト予備校というやつで、講師が直接授業を行うのではなく、講師の授業を撮影し、ビデオに録画し、それを各自で観る、という形態のものだ。ヘイタ自身はべつにサテライトでもいいと思った。それどころか、自宅浪人でいいとさえ思っていたし、今も思っている。また、勉強は一人でするものだという考え方を持論である、人に教えられるよりも、自分で調べたほうが覚えられるからだ。実際に去年だつて、同じような勉強の仕方で勉強して、合格できるくらいの学力はあつたのだ。ほんの少し、本番で失敗しないだけの「運」がたりなかつただけだ。ヘイタはそう考えている。

だが、ヘイタの父母はそんな考え方があくまでヘイタの勉強の仕方が悪かつたと主張し、それを叩き直すために、わざわざ、こんな遠くの校舎に入学させたのだ。

金をかけて浪人している身でこんなことを言つのもなんだが、もつとのんびり構えてもいいと思う。去年受けた模擬テスト もちろん、十分なデータをとり、合否判定がかなり正確にでるものだが、「学力は十分ですよ」と言つてるんだから、気を張つて、必死に勉強することもないだろう。

『でも、こういうふうな考え方してると、カオルあたりは怒るんだ

講師に気づかれないように、あくびを一つかみ殺し、一応、ノートだけとつておく。周りの連中も自分と似たり寄つたりで、半分夢の中だ。無理もない、こんな気持ちのいい日にはじめに授業受けるなんてバカバカしい。

ちらりと時計を見てみる。まだ四十五分しかたつてない。予備校は一時間半で一コマだから、あと半分も残っている。なんで授業を受けているところにも時間の進みが遅いのだろう。

ふと、なりゆきで同居することになった少女　ナナ　のことを考える。

授業の有無に関わらず、ヘイタの帰宅は遅く、十時頃になつてしまつ。親から学費だけしかもらつていないため、アルバイトをして生活費を稼がなければならないからだ。

ナナはヘイタが帰宅とほぼ同時にヘイタのアパートにやつてくる、たまに、遅くなることはあっても、外で待つていることはない。その後、夕食と一緒に食べる。一緒にといつても、ナナがヘイタの分をちょっともらつ、といつ感じだ。外見どおり、ナナは小食だった。そのあとは、ヘイタは勉強し、ナナは適当に時間をつぶす。朝も一緒に朝食をとり、同じ時間に家を出る。

はつきり言つて疑問だらけである。普通、記憶が無ければ、いろいろと悲嘆するだろうに、そんなそぶりはかけらも見せないし、隠してゐるというふうにもみえない。それに、朝から、自分が帰宅するまでいつたい何をしているのだろう。記憶が無いのだから、どこの学校に通つていたかなど覚えていないだらうし、下手にどこかを遊び歩いていれば、補導員に見つかり、いろいろと面倒なことになつてしまうだろう。それに、あの警戒心の無さは、大問題だと思う。

以前は、公共施設で寝ていたというし、一人暮らしの男の部屋に平然と泊まる、それどころか、ベッドを譲るというヘイタに対し、居候の身で申し訳ないから、といってナナは床に寝るのだが、朝起きると、ヘイタの布団で寝ていることもある。理由を聞けば「寒い

から「と答えたが、あれが、中学生の娘のすることだらうか。

警戒心とか、猜疑心とかそういうものが根本的に欠如しているのか、それとも、よっぽど信用されているのか、はたまた、ヘイタに自分を襲うなどできるはず無い。とタカをくくつてゐるのか……。どれが正解だとしても、いくらなんでも無防備すぎだと思ひ。ひとつとして誘つているのだろうか……。

「オラ、そこー… まじめにやれー… そんなら去年落ちたんだろうが！」

ヘイタが声に驚き、顔をあげると講師が自分にチヨークを向け、怒鳴っていた。少しばかり考え方夢中になりすぎてしまったようだ。

「よつ」

ヘイタが今日の授業を受け終え、予備校のロビーに下りていくと、カオルが談話用のテーブルで待っていた。ヘイタの通う予備校では二階から授業に使う教室となつており、一回は受付と、ちょっとした休憩、談話ができるように飲み物の自販機とイスとテーブルが置いてある。

ヘイタがカオルの隣に座ると、カオルはもつていた缶コーヒーを差し出した。

「この間は『めんね。また送つてもらつたみたいでさ』

「いや、別に『いいよ。飲みに誘われた時点での『なるだらうな』とか思つてたし』

「なにそれ、まるでアタシがいつももつぶれてるみたいじゃないの」「違うの?」

「まあ、まるつきり否定できるわけじゃないけど……」

心外な、という感じで言つたカオルだったが、ヘイタに軽く切り返される。

実際、ヘイタの言つていることが正しい。少なくともヘイタと一

人で飲みにいくときは、完全につぶれているか、そうじゃなくても、ヘイタが送つていかなければならぬほどの千鳥足である。

「もしかして、ヘイタ怒つてる?」

「いや、全然。いつものことだから。怒つても無駄だからあきれてただけ」

「……なんだかんだ言つて、結構怒つているよつだ。」

「まあまあ、お詫びはちゃんとするから…………」

「もしかして缶コーヒーがお詫びとか言わないよね?」

「う…………」

わては図星らしい。

会話だけを聞いていると、ヘイタが容赦のない攻めを展開しているようだが、飲んだときのカオルを考えれば、ちょっと仕返ししてやりたいな、というヘイタの心情もわからないものでもないだろう。何を言つても取り付く島のもたないヘイタだつたが、段々しほんでいくカオルを見て、今回もゆるしてやるのうという気になる。もつとも、それもいつものことであるが。

「ホントに反省してる?」

「もちろんです、ヘイタ様」

「男はみんな狼つて知つてる?」

ヘイタはカオルが自分に手間をかけさせたことを怒つてているわけ

ではなく、男の前で無防備によいつぶれたことに対して怒つてている。

ヘイタは予備校生は二種類に大別されると思う。まじめに勉強して、獣医学科とか、医学科を目指す者と、入試に失敗して進路も決まらず、半ばフリーターのように予備校に来ている者だ。後者の連中が話しているのを聞いていると（別にヘイタが盗み聞きしているわけではなく、やたらとでかい声で話しているため、嫌でも耳に入ってくるのだ）そういう「武勇伝」も含め、具体的な経験談まで話している。

「はいはい、酔いつぶれて、朝起きたら、裸で隣に知らない男が寝てた、つてやつでしょ、耳にタコできるつて」

そう言うには言うが、カオルは実際に気をつけようとは思わない。そういう考えは古臭いと思うからだ。大体、ヘイタにそんなことできるはずない。だが、ヘイタが「つるさこ」ので、一応分かっている振りをする。

「うむ、わかればよろしい」

「なんか、歳同じはずなのに、年下扱いしてない?」

「いや、別に、ただ心配なだけ。それとも、カオルは周りの人があうなつてもいいと思う?」

「たしかに、そうは思わないけど、ちょっと行きすぎかなって。ヘイタの場合、オレオレ詐欺とか、シシモタセつていうの? そういうのにすぐ引っかかりそう」

「おれつてそんなに騙されやすそりゃ。」

「うん、すつゞく」

「そりゃかなあ」

「オレオレ詐欺みたいに何百万とかは損しないとおもつけど、ちょっとした面倒は押し付けられてると思つよ」

「うーん、面倒、ねえ」

ヘイタはナナについて思い出した。自称記憶喪失の少女がいきなり居候、出来すぎた話だ。さすがのヘイタもウソ臭さを感じている。だが、本人がそういうのなら、信用してあげなければ、とも思う。でも、自分の事ながら、甘すぎるかな、という思いもある。

「話はちょっと変わる、……変わらない、かもしれないけどさ」

「なによ、その奥歯にモノが挟まつたような言い方は」

「仮にや、飲んだ朝、目が覚めたら部屋に知らない女の子がいて、酔った自分を部屋に運んでくれた子で、運んだ労働に見合つお礼を要求されて、お金が無いつていつたら、今晚泊めてくれつて言われたらどうする?」

「なあによ、それ? 向こうが勝手にやつたことでしょう? そんなの払う必要ないって」

「でも、『運んでもらつたんだから、お礼しないと悪いよな』つ

て気にならない？」

「絶対ならない、大体そんなの怪しそうだよ。知らない人でしょ？ 余計なお世話つて感じだつて。じゃ、ヘイタは知らない人が隣に寝ていても平気なの？」

「だつて、しょうがないじゃん、お金ないんだから」

「まるで、実際にそういうことがあつたみたいな口ぶり……、この間飲んだ帰り？」

「違うつて、あくまでも仮の話」

ヘイタはよくも悪くも正直な人間だ、人に嘘はつけない。カオルのように付き合いの長い人間はなおさらだ。もともと上手な嘘のつき方ではないし、ヘイタの顔にも嘘だと書いてある。

「……それで、家に泊めたの？」

「だから、仮の話だつて」

ヘイタは、言い訳をする、が、無駄な努力だ。ますます、嘘くさく、白々しくなるだけだ。

カオルの顔が険しくなる。まるで、浮氣を発見した恋人のように。「あんたバカじゃないの！？ 泥棒をかこつてどうすんの？ 今に通帳と印鑑盗まれて取り返しがつかなくなるよ！」

「だつたら、家につれてこないですぐに財布だけとつていいくはずでしょ、それに記憶喪失らしいんだ」

「記憶喪失う！？ そんなの嘘に決まってるじゃん」

「でも、ホントに記憶喪失だつたら、ホントに困つてるはずだし……」

「だつたら、警察にでもいけばいいじゃない」

「誰だつて、警察の世話にはなりたくないだろう？」

「だからつて……、それに、女の子でしょう？ あんた、ロココンなの！？」

「だつて、向こうが泊めてくれつていつてきたんだし……」

「そんなこといつて、実際はアンタが泊めるつていつたんじゃないの！？ 巣に持ち帰つたところで手を出すチャンスを狙つてるんで

しょ！」

「だから違うって……」

「嘘つかないでよ！」

「いい加減にしてくれ！！」

ヘイタがついに声を荒げた。呆然とするカオル。たぶん、なじみのカオルにさえ初めてだ、ヘイタがここまで声を荒げるのは。きまずい沈黙……。

「…………ごめん…………」

先に謝ったのはヘイタだった。カオルの呆然とした表情が段々と泣きそうな表情になっていくのをすまなく思つた。

「こいつちこそ」「ごめん、あたし、ちょっとと言い過ぎた」

カオルは顔を伏せ、そう言つた。ヘイタからは前髪に隠れているが、泣いているのかもしれない。

再び、きまずい沈黙……。

「…………悪いけど…………おれ…………バイト、あるから…………」

「そう…………」

どれだけ時間がたつただろうか、たぶん、長く感じられるが、一分もたつていないうだろう。

ヘイタが選んだのはとりあえずこのきまずい時間を終わらせてしまつ事だった。

太陽が茜色に燃えていた。カオルはそれを公園のベンチから眺めた。いつもと同じように照りつける太陽に腹が立つ。まるでへこんでいる自分をあざ笑つてゐるかのように思える。

ヘイタが予備校からバイトに出かけた後、そのまま帰る気はせず、ベンチに座つて缶コーヒーを飲んでいた。ただし、いつも飲んでいるのは砂糖、ミルクたっぷりのやつだが、今は砂糖もミルクも入つてないブラックだ。そういう気分だった。すごく苦い。あまり飲み

慣れていないので、ちびりちびりと飲む。

公園を見回す、そんなに大きな公園でもない、ビルの間に余つた土地を余させておくのももつたいたなく、申し訳程度に整備した感じだ。閑散としていて、自分以外には誰もない。

缶コーヒーを一口飲み、再び視線を落とす。

ふと視界の端に動く影があつた。茂みの中でこちらを伺つてゐる。よく目をこらすと子猫だとわかつた。

大きな目、小さい体。耳をピンと立て、こちらを警戒している様子が見て取れる。

カオルはベンチを立ち、子猫を抱こうと手を伸ばした。

指を動かして誘つてみるが、子猫は警戒を解こうとはしない。

「ヘイタと喧嘩して、子猫からも嫌われる、か……、これが四面楚歌つてやつね……」

と、苦笑交じりにつぶやく。

しばらく子猫はカオルとにらめっこを続けていたが、緊張にたえられなくなつたのか、子猫はカオルの横を通り抜け、走り去つた。反射的に目で追う。

子猫は近くにいた少女に走りよつた。少女はひざをつき、ポケットからニボシを取り出すと、子猫に差し出した。子猫は口で受け取る。地面に置いたものを食べるのではなく、直接手からとるとこを見るに子猫はその少女にかなり懐いているらしい。

「よかつたら、どうです？」

その少女 ナナ ははカオルにニボシを差し出し、やう言つた。

「じゃ、お言葉に甘えて」

カオルにニボシを渡すとナナは子猫を抱いてベンチのほうに連れて行つた。カオルもそれについていく。

ナナはベンチの端のほうに腰掛けると、猫を真ん中に下ろした。

カオルもベンチに座った。三人がけのベンチで、子猫を挟む。

カオルは、さつきナナからもらった二ボシを子猫の鼻先に差し出す。ナナの時とは違い、しばらく四肢をつっぱつたり、二ボシとカオルを交互に見たりと警戒をとかなかつたが、そのうち、カオルもナナと同じように安心できる人物だと思つたのか、二ボシを受け取り、食べ始めた。思わずカオルの口元に笑みが浮かぶ。ナナもそれを見て微笑する。

「やっぱりいいですよね、猫つて」

「そうだね……、実はずっと飼いたかったんだけど、いろいろ事情があつてさ」

子猫は先ほどまでの警戒心を忘れ、カオルとナナにはさまれて、一心不乱に二ボシを食べている。相当お腹が空いているようだ。よくみると、肋骨が透けて見えるほど痩せている、もしかしたら数日間何も食べていかないのかもしれない。

二ボシ一匹はすぐになくなり、子猫はカオルにお代わりを求めるように体を摺り寄せてきた。

「現金だね、君は……」

「それぐらいじゃないと生き残れないんですよ、街では」

ナナがカオルにもう一匹二ボシを手渡し、カオルは「ありがとうございます」とそれを受け取った。

「本来一人で生きている猫を無理矢理連れてきて飼いならし、一時の安らぎを得る、その後、役割が済んだら捨てていく、こっちのほうがよっぽど現金だと思いますけど？」

「…………まあね…………」

子猫は早々に二匹目の二ボシを食べ終わると、子猫はカオルの膝によじ上り始めた。お腹が落ち着いたら今度は遊びたくなつたのだろう。胸の辺りでじたばたしている。

「ふふ、結構エッチだね、君。もしかして、男の子かな？」

と、カオルは胸の辺りでジタバタしている子猫を抱き上げ、股の間

を見た、が、付いてない。では、女の子かと思い、いろいろと観察してみる。

「あ、その子、去勢されてるみたいですよ」

カオルはあらためて子猫を観察した。だが、見た目は普通の子猫で、カオルには不自然なところは無いように思える。

「へえ～、なんでわかるの？」

「この子、大きさの割りには性格が子供っぽいし、性徴もないみたいですね。それに、近くのボランティア団体がお金をだして、野良猫に虚勢手術を受けさせることで、言つ活動をしてるって聞いたことがあります」

「詳しいんだね」

「毎日こんなことしますから。役所の人とかに見つかると、『人を襲つて食べ物をとるようになるからやめなさい』って言われるんですけど、人間の都合でこんな住みづらい所にすまなきゃいけなくなつたんだから、ちょっとくらい良い事あつてもいいと思いません？」

「ん～、そんなこと考えたこと無かつたけど、そう言われてみれば、そう思うかも」

カオルは抱き上げていた子猫を膝の上にそっと降ろした。すると、カオルにはもう飽きたのか、走つて茂みの中に消えてしまった。

「現金な上に薄情か……」

カオルがつぶやいた。

「その勝手なところが猫っぽくて好きですけど……、そのうち戻りますよ、たぶん」

「そういうものかあ」

カオルはそう言いながら、立ち上がり、背伸びをした。さきほどまで、子猫がいたから身動きがとれなかつたのだ。

「あ、そういうえば、ニボシありがとう。お礼にジュークスでもおげるよ」

「あ、そういうのなら、ありがたく」馳走になります。もうれる

ものはもう主義ですから」

「君も現金だね」

そう言つてカオルは微笑を浮かべた。

太陽が半分以上沈み、夕方と夜の境目、人を見分けるのが難しくなつてゐる。車が行きかう音が大きくなり、黄色いヘッドライトが太陽の変わりに街を照らす。そんな時間になつても公園にはカオルとナナの二人しかいない。まるで、街から隔離されているようだ。カオルは缶コーヒー、ナナは缶のミルクティーを飲みながら、しばらく他愛の無い話をしていた。カオルは別にやることも無かつたし、ヘイタとの喧嘩でやる気が無くなつたというのもあり、この名前も知らない少女との話をそれなりに楽しんでいた。

ふと、先ほどの子猫が消えた茂みが音を立てた。何事かと二人が目を向けてみる。音を立てたのはさつきの子猫だった。その隣にもう一匹、落ち着いた雰囲気の白猫がいる。子猫と違つて首輪をつけているし、毛並みも整つてている。おそらくどこかで飼われているのだろう。

「ね？帰つてきたでしょ？」

ナナはそういうながら、白猫に近づき抱き上げた。白猫も暴れたりするそぶりはせず、ナナにされるがままになつていて、この猫もずいぶんと懐いているようだ。

「この白猫、どこかで飼われてるみたいなんんですけど、夜になるとこつそり抜けだしてくるみたいなんですよ」

子猫がテクテクとカオルのほうに歩いていく。その足取りは先ほどと違つた。堂々としたもので、カオルを少しほは信用したのだとかかる。カオルは子猫を抱き上げ、ベンチに座つた。子猫は初対面のときの警戒心はどこへいったのやら、自然にカオルに頬ずりをする。カオルが喉をかいてやると田を細め気持ちよさそうな表情をした。

「ねえ、ちょっと愚痴聞いてもらつていい？」

カオルが言つた。その言葉は子猫に言つたようでもあり、ナナに対してもの言葉のようでもあり、ただの独り言のようでもあった。

カオルは答えを待たずに話を続ける。

「アタシね、今日、喧嘩したんだ」

ナナが白猫を抱き上げ、カオルの隣に座つた。

「その相手つていうのが、幼馴染の男友達でね。そいつが今、知らない他人、しかも女と一緒に住んでるんだって」

「知らない他人の女？」

カオルは昼間ヘイタから聞いた話を話した。ナナは白猫の喉を撫でながら黙つて聞いていた。

「へえ、その男の人つて彼氏さんですか？」

ナナが言つた。からかい半分。

「違うつて、誰があんなやつ……」

「そういう割には彼氏を他の女に盗られて嫉妬しているみたいに聞こえますよ」

ナナは失礼であろうことを何食わぬ顔で言つ。カオルはその態度に少しばかり顔を歪ませたものの、ナナに怒りだすようなことはせず、「彼氏…か、そうかもしれないけど、限りなく近くで別のものって感じだと思つ……」

と自嘲つぽく言つた。

「なんていうか……、たぶん彼氏つていう単語を使わないとしたら、弟つていうのが一番近いかな。なんていうか、ほつとけないんだ。そいつ、今年から一人暮らし始めたんだけど、部屋は片付けないし、健康そっちのけでカツラーメンばっかりだしで、押しかけて、部屋片付けさせたり、料理の作り方教えてやつたりとかしたりしてね。今日、喧嘩したのも、あいつはバカで霸気がないくせに、正直で人が良いからよく人に騙されそうになつたりするから、つて忠告したつもりなんだけど……」

「なんていうか、那人、すごい言われようですね……」

「だつて、事実だし」

ナナはそれが事実だと言い切つてしまつカオルはその男と本当に親密にあるのだろうな、と思つたが、口には出さなかつた。

「自分自身、あいつの事、彼氏だなんて思つたこと無いけど、言われてみれば、嫉妬してるのかもしれない。よくわかんないけど。まあいつだつたら『そんなこと考えてもしようがないよ』って言うんだろうけどね、バカだからわ」

カオルは話をする間、一度も顔を上げず、うつむいて子猫を撫でていた。誰かと話をしたというよりも、独り言を聞いてもらつたといったほうが適切かもしだ。

「あつと、『メンね、こんなつまらない話聞かせちゃつて』

カオルはナナのほうを見て言つた。これはちゃんとした返答を期待する言葉だつた。

「いえいえ、面白かつたですよ」

ナナは立ち上がり、白猫を地面に降ろした。カオルからは逆行で表情が見えないが、さつきと同じような微笑を浮かべているのだろう。「私、もう行きますね。情が移るとかえつてかわいそですかから」情が移るというのは猫に対する言葉だろうか。

「そう、もう遅いしね。それじゃあ、ニボシありがとわ」

日は完全に暮れ、おそらくねぐらに帰るであろうカラスがつるさんぐらに鳴いていた。

「いえいえ、どういたしまして」

そう言い、ナナは暗闇に消えた。

「さてと、アタシはどうしようかな……」

あえて口に出して、子猫に向かつていつてみる。膝の上の子猫はスヤスヤと寝入つていた。

「動けないじやん、これじやあ……」

結局、カオルは子猫が起きるまでそつしてゐるほか無かつた。もつとも、そうしてボーッと待つてゐる時間も、カオルにとつてそういう時間ではなかつた。

まな板の上でジャガイモを切っていた包丁が止まつた。見るどジャガイモを押さえている左手から血が出ている。

ヘイタは台所に絆創膏が常備してある絆創膏を取り出し、皮がはげている中指に巻きつけた。見れば、既に何箇所か絆創膏が巻いてあつた。

常備しているといつても、料理をし始めた時に何度も使つたくらいで、今では全く使つていない。なのに、今日は久しぶりに絆創膏を使つた、しかも何箇所も。

ヘイタは何度目かの苦笑いを漏らすと、再び、ジャガイモを切る。自分の集中力の無さにあきれ半分、あきらめ半分だ。

ついついカオルの事を考えてしまつ。自分でもよく分からぬうちに声を荒げてしまい、喧嘩別れみたいな形になつてしまつた。どうしたものだろ? と、心中で思う。

ヘイタのモットーは「やらなくて良いことはやらない」ということだ。今悩んでいることは、考えても考えても、カオルに会つて話してみない限りどうしようもない。もつとも、喧嘩別れなどよくあることだから、会えば、どちらからでもどうにでもなる。なのに、毎度毎度、ついついどういう顔で会えばいいかと考えてしまう。

それは人としては普通のこと よくあること であるが、ヘイタはそれを嫌つていた。そんなことを考えるのならまず行動で示すべきであり、ウジウジと悩んでいるのはただの逃げだと考えるからだ。

『くだらない……』心のなかで吐き捨て、夕食の支度を続ける。

ノンノン

入り口のドアがノックされた。宗教や新聞の勧誘ならドアチャイムを鳴らすはずで、ノックをするのはナナだけである。

鍵が開いていると告げるとナナは「こんばんは」とあがりこんだ。

「何があつたんですか？」

ヘイタの顔を見るなりナナが尋ねた。

ナナには関係の無いことだから、ヘイタは「別に」と答えたが
「その割りにここ所……」

といつて自分の眉間を指差し

「……にシワがすごいですけど？」

と返された。それでも平然としていればいいのだが、ヘイタの場合、
その性格からすぐに顔に出てしまう。

「さては女性関係ですか？」

ナナがニヤリと笑いながら聞いた。

「おれに彼女なんていると思う？　ただ、ちょっと友達と口げんか
しただけだよ」

「『だけ』って言つ割には結構深刻みたいですが……、私でよけ
れば相談に乗りますよ」

ナナがそう言つと、ヘイタは苦笑し

「いや、大丈夫。つまらない話だし、ナナにはどうしようもない話
だから……」

それは確かに事実であったが、言われたナナはムッときた。拗ね
た様子でそっぽを向く。

「どうせわたしさただの記憶喪失娘で、大して役に立ちませんけど、
そんな言い方はひどいですよ」

「ごめん、そういうんじやなくて、君に話すと单なる愚痴になっち
やうからさ。延々と愚痴られてもうつとひしごだけでしょ」

「それでも聞かせてください、気になりますよ」

「それにさ、なんかそういうのつて現実から逃げるみたいで嫌いな
んだよね、愚痴つても問題が解決するわけじゃないのに、自分の欲
求不満を手つ取り早く解消するためだけに相手を不快にするなんて
最低だよ、それ」

「……いいです、分かりました。もう聞きません、そういうことな
ら我方にも策があります」

そういうと、ナナは「では」とヘイタのアパートを出て行った。

「なんだかなあ……」

ヘイタは自分の言葉がナナを怒らせてしまったのだということは理解できたが、追いかけて謝るのもどういうものかと考え、楽観的に夕食のころには帰つてくるだろうと料理を続けた。

十分後、ヘイタは自分の考えが甘かったことを思い知らされる。具を鍋に入れて一通りの火を通し、味噌をとき始めたところで再びドアがノックされた。

「こんばんは」

どこか淒みのある顔をしているナナの両手には、大型ペットボトルに入った焼酎が入っていた。

ナナによつてマグカップにトクトクと注がれる焼酎。カップの中の製氷皿で作られた氷はほとんど溶けてしまつていて。

ロツクと水割りの中間系になつてしまつているものをヘイタは一口すすり、アルコール度数の高さに顔をしかめる。ビールでさえ厳しいヘイタは焼酎など飲みたくはなかつたが、ナナに「飲んでくれないと泣き喚きますよ?」と脅迫され、飲み比べをするはめになつた。

ナナとヘイタはちやぶ台に対面に座つていて、双方の前にはそれぞれマグカップと焼酎の入つた大型ペットボトルが置かれている。

「ほらほら、何やつてんですか? サッサと飲んでください」

自分よりもはるかに年下である少女にそう言われ、ヘイタは田の前のカップを一息に開ける。ヘイタの視界がグラリと揺れた。田の前にいるナナの顔がぼんやりと歪んで見える。

ヘイタは先ほどのお返しとばかりナナのカップにナミナミと焼酎をついでやる。だが、ナナは水でも飲むかのよつこゴクゴクと飲み干した。

「君……、実は人間じゃないだろ？……」

「さあ、どうなんでしょうね～？ サイ、ヘイタさんの番ですよ？」

ヘイタの前にあるボトルもナナの前にあるボトルも同じくらい、三分の一ほど減っている。大型ペットボトルは四リットル入りなので双方一リットル以上飲んでることになる。

飲んでいる量は同じだが、ヘイタは焦点も定まらず、半ばちやぶ台に突っ伏している。一方、ナナは正座を崩さず、余裕の表情だ。このまま続ければ明らかにヘイタのほうが痛い目を見るだろう。

「どうです？ 話したくなりました？」

ナナは相変わらず笑いながらヘイタのカップに焼酎を注ぐ、まるでヘイタがへ口へ口になつてているのをあざ笑うかのようだ。少なくても、ヘイタにはそう見える。

田の前に注がれた焼酎を虚ろな目で見つめる。頭がボーッとして体が熱い。気持ちよさと悪さが同居した奇妙な感覚。たぶん、明日は一日酔いだらうと思つ。

「わかった、おれの負けだよ……」

ヘイタはギブアップを宣言する。

酒を持ち出したナナに対し、年上のメンツを立てよつと意地になつてしまつたのをヘイタはつくづく悔やんだ。

「じゃ、話してくれるんですね？」

ナナは身を乗り出して頬杖をつき、興味津々な様子でヘイタを見た。まるでゴシップをこよなく愛し、井戸端会議で「こじだけの話」「話を楽しむオバサンそのものだ。

「ただ、予備校で友達と喧嘩しただけだよ」

「喧嘩の原因とかは？」

ヘイタは理由を話していいものか少し踏みとどまつたが、アルコールに後押しされ、話した。

「いいにくいんだけどさ、君なんだ」

「と/orいと？」

「飲んだ帰りに、家出娘に助けられてそのまま泊めることになった

つて言つたらいきなり怒りだして、売り言葉に買い言葉つてやつでコツチも言葉が強めになっちゃつて、口喧嘩になつた」

ナナの中でヘイタと昼間公園で会つた女人の カオル がつながらつた。そもそも、いきなり異性が自宅に寝泊りすることになるなどというシチュエーションはそつそつあるわけではない。それにタイミングも同じである、関連付けて考えるのが自然だらう。

ナナは知らなかつたとはいえ、男女の仲をかき回したことになる。

「……その友達って……女性ですよね？」

すまない気持ちと後ろめたさから、声が自然と小さく弱々しくなつた。

「まあ、一応そうだけど？」

「『じめんなさい、私のせい』で彼女さんと喧嘩をせてしまつて……、まるで泥棒みたいに……」

ところが、ヘイタは首を大きくブンブンと降り、きつぱりと「ちよつと待てよ、彼女じゃないよ。あくまで友達。幼馴染で、たぶん、親友と呼んでもいいと思つけど、彼女なんかじゃない」と、否定した。

『あの女性とヘイタつてどれくらいの関係にあるんだろう』
ナナは一人に悪いとは思つたが、好奇心に勝つことはできず、疑問に思つたところを確かめることにしようと思つた。ひょつとしてちよつとした嫉妬心も手伝つて、そう思つたのもしれない。

「その人つてどんな人なんですか？」

ヘイタは「うーん」と、突つ伏しながら考えるそぶりを見せた後、答えた。

「小学校から高校卒業までなぜかずっと同じ学校でさ、大学もなぜか同じところを志望してたんだけど、おれは落ちちゃつたから予備校と大学に分かれちゃつて。それまで毎日会つて、変な話ばっかりしてたなあ」

ヘイタは、アルコールのおかげで口が軽くなり、ナナへの悪い意味の遠慮が無くなつていた。普段はあまりしない話もテンポよく口か

ら出てくる。

「カオルが……、あ、そいつの名前、カオルっていうんだけどね。誰だったかに一股かけられたときなんか、散々文句言われたなあ、理不尽でさ、一股駆けたやつじゃなくておれに文句言うんだ。で、最近もたまに飲みに誘われるんだけど、すごく理不尽な事いうんだよ、なんで浪人したんだ、とかね。浪人したものはしたんだからしようがないじやん、聞きたいのはこっちだよ」

そう言つてヘイタは「まったくもう」とばかりため息を一つついた。

「でも不思議と嫌いじゃなくて。まあ、良くも悪くも単純なやつだから、裏表が無くて付き合いやすいしね」

「へえ、で今日つてどんな感じに喧嘩になつたんですか？」

「あ、そうだね、話がずれた」

ヘイタは少しばかり考えるそぶりを見せ、再び話始めた。

「なんか、話の種に君がウチに居候……つていうのかな？ しあげめた事情を説明したら、記憶喪失なんて信じられない、そんなウソつき放つておけ。とか言わせて、おれにも体当てなんでしょう？ とか……そんな事言わせて、俺が悪口いわれるのはともかく、記憶喪失で困つてる人がいるのに……」

「へえ、つていうか、それはカオルさんの反応が普通ですよ」「つて？ どういうこと」

「私が言つのもなんんですけど、ヘイタさんはすぐ人にを信用しすぎです。普通、記憶喪失って言われて素直に信じませんよ。失踪した人が警察に届けられるのが嫌で記憶喪失を騙るつていうのはよくある話ですから」

そういうと、ヘイタは思わず苦笑いをもらした。言つている」とがカオルと同じだったからだ。

「あはは、カオルにも同じこと言われたよ。お前は貧乏ぐじを引きすぎだつてね……、でナナちゃんのはホントに記憶喪失なんだよね、一応確かめてみるけど」

ナナは肯定とも否定とも取れる微笑とともに「わあ、ビーヴドショウ」

と答えた。

「でも、人を見たらウソつきだと思えつていつのまゝ、ちよつと悲しいことだと思わない?」

「人を見たら泥棒と思えじやないんですか?」

「ウソつきは泥棒の始まりともいうだろ、だつたら一いつあわせてそうなるでしょ。」

ナナは「まあ確かに」と肯定した。

「そんなこと言つてたら普通に生きていけないよ。例えばニユース番組だつてもウチらが見ててウソかホントか確かめる方法は無いじやん、結局は鵜呑みにするしかない。歴史の教科書だつて、数学だつて、考へてもホントかどうかわからない。だつたらホントのことだと思つたほうが疑うよりも労力が少なくてすむだろ?」

酔っ払いの理屈だなあ　　とナナは苦笑した。でも全て間違つてゐるとはいえない気がした。

「本当にヘイタさんつて合理主義者なんですね」

「合理主義者つてほどでもないけど、ただ単に無駄なことが嫌いなだけだよ、誰だつてそうでしょ?」

「そうでもないですよ、たぶん。特に私とか」

「そう? ま、人それぞれ、三者三様。別にいいけどね

「で、カオルさんなんですけど」

「あ、そういうえばそんな話だつたつけ」

「たぶん、ヘイタさんの性格わかつてくれてますよ。もしかして次会う頃にはそんなことで喧嘩したのも忘れてたりして」

ナナは、夕方、猫を抱いていたカオルの表情を思い出しつて言つた。

「たぶんそだとは思うんだけどね、喧嘩したのも一回や二回じゃないから。でも、いつも無意味に悩む。次はちゃんと覚えるか、このまま一度と同じ関係に戻れないんじゃないかなって、そんなことを考えるんだつたらさつさと電話でもして謝ればいいのに。悩んだつてただの現実逃避でしかないのにさ」

「たぶん、それがヘイタさんにとって大事で重要なことだから、慎重で臆病になっちゃうんですよ。どうでもいいことだつたら最初から悩んだりしないでしょ？重要なことを時間かけて考えるのは当たり前ですよ」

「そういう考え方もいいのかな」

そう言ってヘイタはカップ一杯の焼酎を開けた。焼酎に慣れたのか飲みすぎて味が分からなくなつたのか、なかなか堂に入つた飲み方だつた。だが、飲んだ後で体がグラリとゆれ、再びちゃぶ台に突つ伏し、「ふいー」と息を継いだ。目は半目で体に力が入つていなのが見て分かる。そろそろ限界のようだ。

ナナは席を立ち、ヘイタの後ろに適当に布団を敷き、ゆっくりと寝かせてやる。ゴロンと横向きに寝転がつたヘイタの寝顔はしこたま飲んだ割にはスッキリしていた。

「無意味、無意味って言わないでくださいよ、たぶん、この世界に意味のあることなんてそんなに無いんですから」

ナナがぼんやりとヘイタの顔をみながら呟いた。ヘイタが聞いている、いなは関係無い独り言のようだった。

ベッドから毛布を引っ張りだし、ヘイタに掛ける。秋とか冬とかではないから、毛布だけでも風邪を引いたりはしないだろう。

ナナはしばらくヘイタの寝顔を見つめた。呼吸が完全に落ち着いた寝息に変わつたころ、意を決し、カオルに悪いと思いながらもヘイタの毛布に潜り込んだ。今日で最後にしじつ、最後だからちよつとくらじオマケしてくれてもいいだらう、そう言い訳をする。

「……暖かい……」

生き物は暖かい、当然のことだ。だが、ナナにとってその暖かさは一度背を向けたものであり、自己のなかで敵とみなしたものだつた。

長い間忘れていた。いや、忘れようとしていただけなのかもしれない。独りで生きようと思つた。でもできなかつた。自分がが「シイナ・ナナ」になつた時に全てを捨てることができたと思ったのに

……。

『寒い』

カオルはそう感じた。

独り、布団に丸くなると時々思い出す、前の男にフラれた時を。すごくいきなりだつたことを覚えている。学校からの帰り道、いきなり「ゴメン」と切り出された。向こうの理由は……確か、束縛されるのが嫌、好きな人ができた……たぶん、このどちらか、両方だつたかもしれない。

理由はどうでもよかつた、ただ、その日から当たり前になつていた日常が崩れた。

いつも、アイツに話を聞いてもらつていた、それが無くなつただけで、日常が乾ききつてしまつた。誰にも話せないことがたまつた、同性への愚痴など、女友達にはできなかつた。彼女たちは口が軽い、自分のいないところで自分もまた、同じように話されていると考えると、男性にしか話せない事だつた。

そのとき、アイツの代わりになつてもらつたのがヘイタだつた。幼馴染ということ以前から仲がよく、ヘイタだけには何でも話せた。また、ヘイタはいつだつてカオルのそばにいた。

それが高校を卒業したらまた、日常が壊れてしまつた。落第したヘイタと合格したカオル、毎日、あつて話して……わざわざ会わなくちゃもう会えなくなつた。

いつからこんなに寂しがり屋になつたのだろうか。これではまるで彼氏に甘えたがる女のようだ。今日も今日で、なんであんなことを言つてしまつたのだろう。

「……あ～あ……」

ため息をつきながら寝転がり、天井を見上げた。見慣れた景色のはずだが、やけに高く思える。

そのまま呆と天井を見る。体の力を抜く。脱力。からだが床と張り付くような錯覚を覚える。

五分ほどそうしていた。何もしない五分といつのは割と長いものだ。

「……よしッ！」

少しばかり気合を込め、体を起こす。

頭の中でいくら考えても終わらない。それだつたら今、さつさとヘイタのところに謝りに行つて、この事件に決着をつけたほうが早い。

天井を見つめた五分は、その覚悟を決めるための時間だった。踏み切つたからには二の足は踏まない。中途半端に止まつても仕方が無い。

部屋の隅に投げ出してあつた衣服を適当に身につけ、手串で髪を整える。鏡で確認、適当にやつたにしてはまあまあだらう。

カオルはそのまま携帯と財布をポケットにねじ入れて、アパートを飛び出した。

ナナはおもむろに毛布から這い出した。

相変わらずヘイタはグッスリと眠つている。よほど焼酎が効いているらしい。あれだけ飲んだのだ、だれだつてそうなるだろう。ナナがヘイタの様になつていなければ、ナナのほうのボトルの中身を、あらかじめただの水にすり替えていたからだ。

「水と焼酎で飲み比べするなんてね。ちょっと、間が抜けすぎかな。ホントに『疑う』って事を覚えたほうがいいんじゃない？」

聞こえないとは思いながらナナはそう言つた。なんとなく言わないで出て行くのはウソをつくようで嫌だつたからだ。もっとも、ただの自己満足だとは自覚していたが。

荷物は昼間のうちにまとめておいた。気ままな放浪生活だ。元々

そんな大した荷物はない、着替え一式とヘイタからくすねた二ボシが少々、プラス、それを入れるナップサックだけだ。

ナップサックを肩にかけ、ヘイタに掛けた毛布を直してやる。あ、寝顔、可愛いななどと思つたりする。

「それじゃあ」

そう言い、入り口のドアに向かつた。靴を履く。なんとなく靴紐を結びなおしてみた。右、左と結びなおした。なんとなく気に入らなかつたのでもう一回結び直そうと靴紐を解いたところで、外側からドアノブが回つた。

開いたドアの向こうにいたのはナナが昼間公園で会つた女　カオルだった。

少しの沈黙が流れた。

双方呆然としている中、先に口を開いたのはナナだつた。

「……どもです」

「……まさか君が……」

「はい」

ナナのいつもの微笑を、カオルは幾分強ばつた笑みで返した。ヘイタを騙して居候している女。そのイメージと実際のナナとのギャップがカオルの心情を複雑なものにしていた。

「なんか、いろいろとご迷惑をお掛けしました。私のせいで一人を喧嘩させてしまつたみたいで……、すいませんでした」

ナナはペコリと頭を下げて言つた。

「そんなに謝らないでよ、ヒステリーおこして怒鳴つたあたしがバカみたいじゃない。実際、バカな事したなつて思つてるけどわ」

カオルは苦笑した。

「で、ちょっとお願ひなんですけど、ヘイタさんが起きたら、いろいろ迷惑かけてごめんなさい、って伝えてもらえませんか?」

「そういう言葉、自分で伝えようよ」

「それはちょっと……、私、今からまた、漂流しようと思つてるんです。ヘイタさんの顔をみたらもうとにかくやうんで、出て行って……、出て行って明日からの生活にアテはあるの？どこに泊まるの？何を食べるの？」

カオルの言葉は家出しようとすると娘を心配する母親のそれだった。

「今まで、一年くらいこんな生活してきましたから、それにカオルさんが心配するほど私、子供じゃないんですよ」

「子供はみんなそう言つんじゃないの？」

ナナは力なく笑い

「そうかもしけませんね」

と曖昧に答えた。

「そうだとしても、なんでそんな放浪の真似ごとしてるの？ つらくなないの？」

「だれだって名前も過去も何もかも捨てたい時つてあると思うんです。わたしはそれをやっているだけですよ」

「それにしたって、いつまでもそんな生活してもしようがないじゃない」

「いいじゃないですか、私がどうなると貴女には関係ないことになんですから。それに私のこと何も知らないくせにわかつたような事言わないでください」

表情は穏やかといつていよいモノだったが、口調、言葉から断固とした離別の意思が感じられた。

「じめん」

「……だから、貴女に謝られたらこちらの立場がないじゃないですか……、かき回してるのはこっちなんだから……」

ナナはそう咳き、ヘイタのアパートを出る。入り口で言葉を失つているカオルに背を向ける位置まで進んだ。

「それじゃあ。……公園での時間は結構楽しい時間でしたよ」

そういう残し、ナナは夜の静寂に消えていった。

カオルはそれを追いかけることはできなかつた。

「ヘイタの視界にぼんやりとした天井が見えた。照明は着いておらず、薄暗い。体には毛布が掛けられているのがわかる。ナナが掛けてくれたのだろうと思つ。視界がゆれる、頭痛い。飲みすぎた。

「やあ

知つている声がする。やたらと重たい体を起こす。声の主はカオルだつた。暗くて顔がよく見えないが、なんとなくわかつた。

「なんでお前がここに？」

「ん、昼間のこと謝りに來た」

「だからつてこんな時間に……」

「ヘイタだからいいかなつて。昼間は「メン、あたし、ビリかしてた」

「いや、おれも。なんか、売り言葉に買い言葉つてやつでさ」

喧嘩はそれで終わつたした。もしかしたら、既に終わつていたのかもしれない。やつてみれば簡単なものだつた。

「大分飲んだみたいだね」

「うん、ナナと勝負してたんだ。あの子、お酒強くてさ。コツチが先につぶれた」

そういうえば、部屋の中になな姿が無い。起きて出かけるには早すぎる時間だし、今日は酔つていいはずだ、おいそれと外出できないはずだ。

「さつきまでそこで飲んでたはずなんだけど、中学生くらいの女の子知らない？」

「その子ならさつき出て行つたよ」

「出て行つたつて？」

「当てのない旅つてやつを続けるみたい、これまでずっとそんな感じで生活してるつて言つてた」

「なんだって突然そんな事、酔っ払つてるときに」

「彼女、全然酔つてるようには見えなかつたよ」

「そんなわけないよ。少なくとも、おれと同じ量飲んだんだから、

顔に出なくてそれなりに酔つてるはずだ」

そこまで言つとヘイタはアルコールでフラフラな体を無理やり起こし、入り口のほうに向かおうとした。当然、足取りもおぼつかず、危なつかしいことに上ない。だが、それでもなんとか前に進もうと懸命だ。

数歩進んだところでバランスを崩し、転倒しそうになつた。あわててカオルが肩を貸し、それを防ぐ。

「ちょっと！ どこいくの！？」

「ナナを探しに行くんだ。出て行くなんて酔っ払つた末のたわ言だろ？ きっとそこらへんで横になつてゐるに決まつてゐ、外で夜明かしなんてしたら体に悪いだろ」

「だから、全然酔つてなかつたつて。それに、あの子は……」

「あの子はヘイタが追いかけてくるのを望まないと思つよ？ その先は事実を変えて伝えた。

「そんなのもし本人が酔つてないつて言つても、實際酔つてたかもしれないし、おれの行為が望まれないとしてなんで望まないか聞く権利くらいはあるよ」

『この酔つ払いが……』カオルは心中で頭を抱えた。完全に酔つ払いの理屈である。この分だとさつきナナと話したことを説明しようとしてもまともに聞いてくれないだろう。

だが、一理あると思うのはカオルの考え方がおかしいのだろうか。ナナは独りを望んでいるのは確かなことなのか、彼女の立場について考える。私はアイツに振られたとき一人になつた。でも、ヘイタがいるから一人じゃなくなつた。誰かがいる、それはつらいことだつたか。むしろ心地よかつたのではないか。では、どうしてナナは独りになりたがるのか。

もしも自分がナナなら　ナナに何があつたかはわからないけれど　どう思うだろうか。それは何通りでも答えが出せる、できの悪い試験問題のようなものだ。得た答えは自分だけしか納得させられないかもしない。常識的に間違っているかもしない。だが、自分のなかではそれが正解だと思うのだ。他人はとりあえず関係ない。それをそのまま解答欄に書いてみるしかない。

「ヘイタ！いいよ、ここでおとなしく寝てて、わたしが探しに行く」カオルはヘイタを押しのけると、アパートを飛び出した。ナナの行き先は心当たりがあつた。

公園のベンチに寝転がり、する事もないのでなんとなく夜空を見上げる。高層ビルに切り取られた夜空、それでも星は綺麗だ。シイナ・ナナになつて何度空を見上げただろうか。まだ春だといふのにとても寒い、冬空よりも寒い気がする。

「！」

それはいきなりだった。ナナの腹部、みぞおちの辺りに衝撃が走つた。

何事かと思い見てみれば、昼間の子猫がナナのおなかの上で『なにやつてんだよう』とでもいいたそうに座つていた。ボーツとしている間に飛び乗ってきたらしい。

ナナは「やあ」と一声かけると、再び夜空を見上げる。子猫はナナの体温が心地いいのか、腹部の上で丸くなり、額をこすりつけてナナに甘えている。

「あつたかい……」

子猫ののどを撫でてやりながらそう感じた。その暖かさを確かめたくて、子猫の背中を抱く。自然とまぶたが閉じていった。そのまま眠つてしまいそうだった。

……

どのくらいそうしていただろうか、あるいは眠ってしまったのか
もしれない。不意に頬に暖かいものを感じた。なんだろうと薄目を開けると、カオルが立っている。頬のぬくもりはホットのミルクティーだった。カオルは昼間の別際のようにスッキリとした笑顔を湛えていた。

ナナはその笑顔が多少癪に障つたが、いつもの笑顔を貼り付けると、「ありがとうございます」と礼を言い、ミルクティーを受け取つた。だが、受け取つただけで、起き上がりもせず、プルタブを開けもしなかつた。

カオルはナナの隣に座ると自分の分のホットココアを開けた。一口飲む。

「あ、ミルクティーは嫌いだつた？」

「何か御用でしょうか？一応、分かれるときに一応の感情を伝えたつもりなんですけど」

ナナはカオルの顔ではなく、夜空を眺めながら言つた。

「ん、あなたは別れたつもりでも、こつちはそうじゃないから」「自分勝手な理屈ですね」

「あなたもね」

カオルはニヤリと笑つた。ナナも同じように笑つた。

「言われてみれば、確かにそうですね。自分勝手なのは私のほうです」「でも、実際にこつちも自分勝手行動してるって自覚はあるから別にそのことを攻めようっていうのじゃないよ。人間ってやっぱり自分勝手なものだし」

カオルはそこで一旦言葉を切り、少し表情を引き締めた。

「ただ、勝手をやるならやるなりに説明をして欲しいの。例えば、なんていきなり出て行こうとするの？とか、結局あなたは何をしているの？とか、記憶喪失っていうのもたぶん、ウソなんでしょう？失踪する時によく使われる上等手段だもの」「やっぱりわかりますか？」

「そんなのを黙つて信じるなんてヘイタくらいだよ」
ナナはしばらく考えた末、渋々と「しょうがないですね」と夜空に向かつて独白するよつに語り始めた。

「ホント、つまんなくて、どうでもよくて、恥ずかしい話なんですけどね……どこから話しましょうか」バカみたいな話なんですよ、実際。付き合つてた人と別れて、その過程に疲れた。それだけの事なんですよ

ナナは一度言葉を切り、力オルの方を向いた。

「私、いくつくらいに見えますか？」

「何？ 唐突だね」

身の上話とはぜんぜん関係の無い話である。が、「いいから答えて」と促すナナに力オルは「中学生くらいかな」と答えた。

「そうですね、それくらいですよね」

「それがどうしたの？」

「私、本当はハタチ超えてるんですよ」

力オルにとつてその話はにわかには信じがたかった。どこからどう見ても、中学生にはみえない。低い身長、起伏が無く、丸みの無い、少年の体つき。下手をすると小学生にでも間違われそうだ。

「冗談でしょ？」

「それが、ホントなんです、なんなら高校数学でも解いて見せましょうか？」

ナナの言葉は冗談めかしたものだったが、そこまで言つのだから本当の事なのだろう。

「医者は原因不明のホルモンバランスの異常つて言つてました。うまく女性ホルモンが生成されなくて性徴が中途半端になつてしまつた、ということらしいです。まあ、原因は不明つて話ですけど、環境ホルモンとかありますから、別に不思議なことじやないんでしょ

うね

カオルはナナの告白を黙つて聞いている。「外見だけなら童顔のちょっと行き過ぎたものだと思えばいいんですけど、私、そのせいで子供できないんです。私は生物として出来損ないの欠陥品なんですよ」

ナナは子猫を悲しそうに、愛しそうに抱いている。虚勢された子猫を。

「私がそれを知ったのは好きだった人に告白して、進展している真っ最中でした。私は彼のことが本当に好きでした。だから、出来損ないの私のために彼の人生を狂わせたくなかつた。だから、失踪届けを書き、記憶も過去も人格も捨てて私はナナになりました」

ナナはまるで人事のようにとつとつと語る。それは完全に想いを取り去つた結果なのか、それとも未だ想いを引きずつているのか。

「でも、捨て切れなかつたんですよ。ヘイタさんの所に居候しているうちに、その生活を続けたい自分に気づいたんです」

カオルは、思わず心の中で思わず苦笑した。カオルも捨てたつもりで捨てられていないものがあった。昔の男に振られた時、「もう一度と男と付き合つものか」と思つたが、ヘイタと恋人に近いやりとりをしている。

矛盾だ。男とは決別した自分、でもヘイタに少なからず惹かれている自分。ナナもカオルと同じパラドックスを抱えている。

カオルのパラドックスはまだ解消されていない。だが……

「ホント全部捨てたつもりだったのに、頭悪いです、私」

ナナは子猫を抱き、ベンチの上にうずくまる。子猫は気持ちよく寝てたところをナナの都合で起こされたことで多少気分を害したようだが、おとなしくナナに抱かれている。

ナナの話はそこで途切れた、一通り話しあは終わつた。間の悪い沈黙が二人と一緒に流れる……かと思われたが

「ホント、バカだよ」

「え!?」

「わたしも、君もね」

馬鹿呼ばわりされたナナは、いきなりすきで怒りよりも、困惑のほうが大きいような表情をした。

「自分で勝手に考えて、自分で勝手に矛盾抱えて、勝手に苦しんでる。そんなに自傷自縛が好きなのかな」

カオルは笑っていた。その笑いは自分自身を笑うものだらうか。「その子猫、去勢されてるらしいけどさ、人とか猫と付き合つときに子供できるできないとか、できそこないとかつて考えてると思う？」

子猫は相変わらず、ナナに抱かれて能天氣に眠っている。その眠りは安らかだつた。

「そんな事、考えたつて状況は変わらないじゃない。だつたら、考えないで能天氣にやつたほうが得だよ」

カオルはそう言いながら、ヘイタのことを思い出した。受験に落ちても能天氣に笑っていたヘイタ。その能天氣さが腹立たしく、いらだつたものだが、今は、少し、ほんの少しだけ、かつこよく見える。「そんな矛盾とかなんだの考えてないで、ヘイタがいいならヘイタにくつついていればいいのよ、そっちのほうが自分にとつていいのならね。わたしはこれからそうするよ、だつてそれが自分の望みだもん、自分の気持ちにウソはつかない、後悔はしたくないから」「くだらないですよ、そんなの」

ナナの表情は暗闇でわからなかつたし、声のトーンは変わらないものだつたが、その台詞はカオルに対しての明らかな批判の情を表していた。

「自分の考え方押し付けるだけ押し付けて、自分に酔つて気持ちよくならないでください。そんなの大きなお世話つてやつです。それに年下のクセにえらうこと言わないでください。自分の過ごした年月が無駄になつてるみたいでムカツキます」

ナナはうつむいていた顔をゆっくりとあげる。その表情は笑いながら怒つているという器用な表情だった。

「もう頭にきました。潰します。完全に跡形残らず、再起不能になるまで」

ナナはそう言って、立ち上がり、子猫を地面に放した。

ホントはナナ自身、気づいていたのかもしれない。ただ、きっかけが無かつたとか、自分の気持ちがわからなくて困惑していただけかもしれない。でも、それはあくまで「かもしれない」話だ。本当の事はわからない。だったら、今、自分でやりたいと思つた事をやろう。たぶん、それが、今の自分の中での真実だから。

「ヘイタさんのところで、ガチンコで、朝まで飲みましょう」カオルはフンと鼻を鳴らし、「望むどいよ」とはき捨てた。

やたらと太陽がまぶしく、部屋が暖かい。もう脳を回っているのだろうか。

「頭痛い、だれですか？ こんなになるまで飲もうっていった人」ヘイタのアパート、ちゃぶ台は天板がみえない。ブランティー、リキユール、日本酒、まさにカオスだ。

「アンタでしょ！ あ～あ～、自分の声が頭に響く……」

床にヘイタ、カオル、ナナが絡まって転がっていた。三人ともうめき声を発し、まるでゾンビのようにはいざりまわっている。

頭痛と吐き気にナナは地獄のような苦しみを感じる。そのくせ、唇は笑みの形に歪んでいた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4696d/>

自分勝手にin my life

2011年1月24日21時45分発行